魔法少女リリカルなのはStrikerS～孤独の歌～

灯火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～孤独の歌～

【Ｎコード】
Ｎ６３４８Ｚ

【作者名】
灯火

【あらすじ】
３０年間の人生に幕を閉じた…はずだったんだけど…
前世とは違う人生、前世とは違う容姿、前世と変わらない境遇、目的もなく、目標もない、そんな空っぽな2度目の人生。
けど…そんな中、出会った少女の笑顔は…なんだか…暖かかった。

第一話「人生３０年？」（前書き）

小説を書くのは初めての上、作者はリリカルなのはをそこまで深く分かってないので、多々至らない点があると思いますが、よろしくお願いします。

第一話「人生３０年？」

仕事の帰り、ふと考えた…

生まれてそろそろ３０年、俺はいったい何をしているんだろうか？

仕事内容以外で誰かと最後にしゃべったのは、いつだっただろうか？

家族…は初めからいなかった、友達…は作らなかったのか作れなかったのか、まぁ存在した覚えはない。

夢…特にない、趣味…特にない、目標…立てたことがない、ただ毎日仕事に行って、帰って、寝る。

毎日毎日それを繰り返すだけ…あれ？なんのために俺、生きてるんだろう？

「人間元来一人で生まれて一人で死んでいくのである」ってのは、誰の言葉だったか？

…うん

…死のう。

でもどうやって死ねばいいんだ？

出来ることなら楽に死にたい、苦しんだりせずに一瞬で…

そんな事を考えながら歩いていると、ふと目の前の横断歩道に少女が見える、信号は…赤い色で、馬鹿みたいなスピードで車が走ってきていた。

意識する前に、体は動いて、少女を車の前から突き飛ばした。

眼前にゆっくりとスローモーションのように迫る車、法定速度って、守る奴いるのかな？

頭に浮かぶのは、今までの人生…あれ？…これ背景違うだけであんま変わんねえぞ？

…まぁでも、このスピードなら痛みを感じる暇もないだろう。

ある意味、よかったのかな？

そんなことを考えながら、俺の人生は幕を閉じた。

…はず…だったんだけど…

第一話「人生３０年？」（後書き）

導入編？

はじめての小説におっかなびっくりで…Ｏｒｚ

第二話「魔法都市？」（前書き）

導入編は４話までの予定です。
出生～転機となる場面までは、できるだけ詳しく書きたいのでご了承ください。

第二話「魔法都市？」

――――真っ暗だ。

俺。どうしたんだっけ？

確か…仕事の帰りに死のうと思い立ち、んで幼…女の子をかばって車に…

俺死んだよな？うん、あのスピードの車と衝突したんだし死ぬはうだよね？…ね？

――ここが死後の世界ってやつなのかな？

なんかイメージと違う。

頭を整理しながら、考える…

死のうと思ってすぐ死ねた、しかも痛みを感じる間もなく、これは神様に感謝しないといけないな…俺無神論者だけど…神様ありがとう！！

しかし誤算が一つ、

―死んでも意識がある―

これには正直困った、死んだら意識なんかなく何も感じなくなるんだとばかり思っていたが、意識はしっかりしてるし、なんか生温か

いし、息苦しい……うん？

息苦しい？んなばかな、何で死んでるのに息苦しい？死んでも呼吸ってするのかな？

――しないよな？

予想と違う状態に戸惑う俺、さらに追い打ちをかけるようにいきなり全身が絞め付けられた。

「――――――！？！？」

痛い、とんでもなく痛い、痛みも感じるのか！

声も出ない！

何かに引っ張られるような感覚、急に辺りが眩しくなった。

「もう少しですよ！頑張って！」

――なにを？

「今頭が出てきましたよ！もう一息です！」

――頭？なんの？

「赤ちゃんも頑張って！もうすぐ出られるからね！」

――赤ちゃん？誰の？

次の瞬間、何かを切られるような感覚と鋭い痛み。

「オギャアーーー！？（いてええええええ！？）」

思わず叫ぶが、え？オギャア？

「おめでとうございます、元気な男の子ですよ！」

――は？

だんだんクリアになる視界、映ったのは粉でも舞ってるような景色と、色とりどりのオーラ？を纏った看護士たち、変な顔の医者。

――病、院？

ちょっと待ってくれ！頭が付いていかない何がどうなってるのかさっぱりわからない。

ショートしそうな頭を抱えようとして気付く、なに…この手？、

そこにあったのは、小さな赤ん坊の手、全裸の体…

「オギャア～～～～～！？！？（なんじゃこりゃあああああああ！？！？！）」

――前言を撤回する…神様とか…まじ死ねよ…

そして、自分のことで頭がいっぱいだった俺は、母親であろう人物の複雑な表情に気が付いていなかった…

――新生児室――

あれから、丸一日たった。俺はいまだ整理のつかない頭で状況を確認していた。

?俺は猛スピードの車に轢かれて死んだ…はず
?だけどなぜか生きていて、体は赤ん坊になっている
?転生?
?プレートに書いてある文字が読めない…てか何語?周りの機械も見たことないし…
?なんか眼がチカチカするっていうか、変なオーラが見える
?俺の母親であろう人物は一度も俺を抱いていない（てか顔もろくに見てない?）

まぁ…?はどうでもいいとして、重要なのは?〜?だ。

まず、?…認めたくないが、状況的に転生って考えるのが一番しっくりくる。

次に、?…見たこともない文字ってことは、ここは外国?でもしゃべってる言葉は普通に聞き取れる。
となると考えられるのは…別の世界?

最後に、？…これが一番の問題だ、なんかハウスダストのＣＭみたいな、なんて表現したらいいのか、細かい粒みたいなものが空中にたくさん浮いている。でも触ろうとしても触れない…なにこれ？

そしてなんか、看護士もそうだけど周りの赤ん坊もなんか、いろいろな色のオーラ？ってか光の膜みたいなのに包まれてる、てか俺も包まれてる…色は薄緑。

死ぬ前に、こんなものが見えた覚えはないから、過去に戻った。とかではなくまったくの新しい体と考えるのしかない。

よし、まとめよう…つまりは…

俺は人生に絶望して死にました⇒でも神様の気まぐれで前世の記憶を持ったまま転生しました⇒しかもここはどうやら前住んでたとことは違う世界っぽい⇒しかも変なものが見える目のおまけつきだ♪⇒神様ってやつは…俺が嫌いなようだ⇒もうやだ…この人生…

――――それからさらに、４日たった。

ケージの前に誰かいる、誰？この女の人

疑問に思っていると、近くにいた看護士が女性に声をかけた。

「退院ですね、外は暗いので気を付けてくださいね」

「――――――はい、お世話になりました。」

ああ、こいつ母親か…初めて見たよ顔、変なオーラ?は緑色ね、はいはい一緒一緒。

そのまま俺は、母親?に抱かれて病院を後にする。

――で、現在なんかどっかの建物の前にいる。時刻は深夜。

なんか門にプレートが貼ってあるってことは、何かの施設かな?…読めないけど。

で、この母親?かごに入れた俺を、門の前に置いて泣きながら何か言ってる。

「――――――だから、ごめんね…ごめんね…貴方が悪いんじゃないのよ、あいつが…悪いの…」

えと…つまりは、どっかの男と子作り⇒捨てられた⇒もう出産拒否できない日数がたっていた⇒でもこの子を見ているとあの男を思い出すから一緒にはいられない⇒全部その男のせいだから、怨むならそいつを恨んで

――知らんがな。

というか、今回の俺は特殊な例として、物心ついてない赤ん坊に何言ったって覚えてないだろう。

じゃあ、何のために？そんなの決まってる自分を正当化するためだ……うぜぇ。

前の世界の母親も…そうだったのかな？生まれたばっかの俺に、自分を慰めるためだけの言い訳を並べて、捨てて行ったのかな？

――何かすげえ腹が立つ。怒鳴り散らしてやりたいが、悲しいかな「オギャア」ぐらいしか言えない身…転生したっていうのに、前と何も変わらない状況…いや、捨てられる様を認識できる分、今のほうが悪いか。

そして戯言を並べ終わった、母親？…いやもうどっかのおばさんは去って行った。

一人残された俺は、これからの事を考えていた。まぁロクな施設じゃないよな…経験上

――こうして、俺の2度目の人生は幕を開けた…けど、もう幕降ろしてぇよ…

第二話「魔法都市？」（後書き）

話が思ったように進まない（；´д｀）

２話目で原作キャラの一人も出てこない体たらくＯＲＺ

小説書くのって難しいな；；

次回いよいよ原作キャラも登場して「なのは」らしくなってくる…かな？

第三話「出会い？」

――自分を生んだおばさんに、孤児院の前に捨てられて7度目の夏――

ジリリリリ！！

カチ！

枕元の目覚ましが鳴り、目を覚ます。体を起こし辺りを見回す。

お化け屋敷みたいな安アパート、必要最低限の物しかない狭い部屋

…ここが、今の俺の住処だった。

俺の引き取られた（捨てられた）孤児院は「エルザード孤児院」という個人経営の孤児院だった。…いや別にダジャレじゃねえよ？

どうやら、この国？「ミッドチルダ」という場所では孤児育成に対し、多額支援金が降りるらしい。孤児の育成に力を入れているのか？それとも孤児が量産されるほど危なっかしい世界なのか？まぁ詳細はよく分からないが、ともあれ孤児を引き取っている施設には支援金が支払われる。

勘のいい人なら気付くだろうが、俺が引き取られた孤児院は、経営者が楽して稼ぎたいがためだけに作られた施設だった。

孤児を拾い、最低限の食事だけ与えて育てる、残ったお金は懐に入れて、成長した子供には家事をさせる。新しい孤児が来れば、その成長した孤児に育てさせる…といった感じだ。

実際俺の育児（世話？）をしてくれたのも１０歳に満たないであろう子供だった。

この世界の常識なんかについても、その子供やほかの子供に教わった。

この「ミッドチルダ」という世界では、魔法が日常的に使われてる世界らしい。

初めて聞いた時は、鼻で笑いそうになったが、残念なことに事実っぽい…ただ、この世界の魔法は俺のイメージしていたそれとは違って、超科学的な物みたいだった。

そして、魔法について知るのと同時に、俺の目についてもようやく分かってきた。どうやら俺の目は、空気中の「魔素」や人の持っている魔力、という物が目視できるようだった。

まぁ見えたからどうというわけでもなく、４歳になってようやく自分の意思で切り替えられるようになるまでは、目がチカチカしてしょうがなかった。

そういった感じに、この世界について知るにはこそこそ役に立った…精神的にはもう立ち直れないかもしれない…意識がある状態で赤ん坊とか…マジ拷問…

しかしそんな孤児院も、５歳になったころに金だけ盗んで逃げだし

た。

正直、気持ちが悪かった…他人を利用することしか考えてない経営者、影で不平不満を言うだけでなにもせず、空から恵みが降ってくるのを待つだけの餓鬼共。…まぁ逃げ出す時に、「時空管理局？」とかいう軍隊みたいなとこに通報しといたし、まぁなんかあるんじゃね？

逃げ出した後も、この世界については驚かされた。まず仕事、なんか今の俺と同じぐらいの歳…１０歳にもなってないような子供たちが、普通に働いてたりする…どうなってんだ？労働基準

そして、「時空管理局」という軍隊みたいな組織、なんか１０歳ぐらいの女の子が街頭のテレビにエースとして映っていた。

これなら俺も職に就けそう、とか思ったんだけど…この世界にも履歴書はあるみたいだった。子供でも履歴書を持参しないと雇用してくれないらしい…なんでそんなとこだけしっかりしてるんだ？

つまり、こっちの世界での自分の名前すら分からない俺は、もちろん論外、しょうがないので残飯漁って腹を満たし、公園で寝る生活を繰り返した…なんというホームレス。

孤児院から盗んだお金は、まだあったが…いざという時のために取っておいた。

それで、いつ頃だったか…まぁ慣れた手つきでゴミを漁ってる時に、ふと見つけた壊れた機械、見た感じテレビの様な物。

前世では、何を隠そう家電製品の修理の会社に１４年間勤めていた俺（孤児院を出ないといけない年齢が１６歳だったから）もしかして直せるんじゃね？と中を見て見ると、元居た世界と殆ど変わらない構造だった。

これは金になる！って考えた俺は、取っておいたお金で部品や工具類を買って、捨てられている機械を片っ端から集めて回った。

中には構造がさっぱりな物もいくつかあったが、家電製品類は概ね元の世界と同じような感じだった。

その後、俺は直した家電品を安値で販売、と同時に家電類の修理を請け負う小さなお店の様な物を始めた。場所はいつも寝ていた公園で、レジャーシート引いただけの小汚い店だった。

しかし、意外なことにこの世界の人たちは、財布の紐が緩いのか？子供が売ってるのを見て同情する偽善者ばかりなのか知らないが、店はそこそこ繁盛していた。

しかしそうなると、困った問題も出てきて、先に挙げた構造がさっぱりわからない機械類の修理も出来ないか？と聞かれることが多くなってきた。

出来ないっと答えても、大抵は子供なので問題なかったが、それで客足が遠のいては困るので、稼いだお金で本屋へ行き、いろいろな機械類の本を買い勉強した。その甲斐あって、家電品はもちろん、

簡単な構造をしている物なら、魔導師たちが使う「デバイス」という物も修理できるようになってきた。

そうなると今度は、やたらめったら「デバイス」の修理の頼まれることが多くなってきた。簡単なものなら修理は出来たが、複雑な「カートリッジ」などを搭載している物はお手上げだったので、また本を買って商売の合間に勉強した。

おかげで、5歳の頃から2年たった今は、生活するだけなら不自由なく暮らせるぐらいは稼げるようになっていた。

ただ…そんな俺を最近悩ませている奴が…一人

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

そう言って、店の前にしゃがむ金髪の女性、ロングの金髪を緩く後ろで結んだその子は、１０人に聞けば9人以上は美少女と答えるであろう容姿をしていた。

「……またあなたですか」

俺は感情のこもってない声で答える。

「う～ん、だめだよ？お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

そう、これが最近の俺の悩みの種だった…この女性、フェルトだったかフェイトだったか？

まぁとにかく、最近毎日来てはくだらない話を振ってくるだけで、なにも買わずに帰っていく。しかも、話す内容は「家族はいないの？」とか「何か困ってない？」とかそんな、どこかの保護官みたいなセリフばっかりだった。

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

何の見返りも求めず、差し伸べられる優しさはただ単純に気味が悪かった…

「……あなたが、帰ってくれれば元気になりますよ」

感情のこもってない声で返す。

「その…話したくないなら無理にとは言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

…？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「――――――！！？」

ふと、疑問に思ったので聞いてみただけだった。

すると少女は、何か驚いたような目をして固まっていた…俺何か変なこと言ったか？

「ご、ごめん…また、来るね…じゃあ」

そう言って、走り去っていた…別にもう来なくてもいい。

フェイトＳｉｄｅ

「こんにちわ、今日もお店頑張ってるんだね」

私は、いろいろな機械が並べてられているシートの前に座り、その店主である少年に声をかけた。

「……またあなたですか」

返ってきたのは、少しも感情のこもってない声、この子を見つけたのはいつだったろうか…

仕事の帰りに立ち寄った公園で、一人シートの前に座っていた少年、たぶん年齢は私より少しだけ下ぐらい、ボロボロの服を着て、まったく切っていないように見えるボサボサの長い髪、元は銀なのだろ

うけど汚れて灰色にみえる髪の色、まるで世界から一人切り離されたような寂しげな眼をしていたその子を、ほおっておけなくて声をかけたのが確か最初。

なんだか…なのはに出会う前の自分を思い出してしまいそうな目だった。

それから、少しでも心を開く手伝いになればと思って、仕事の合間にたびたび訪れているけど、心を開くどころか、うっとおしく思われてそうだ。

でも…それでも私と話すことで、少しでも寂しさが紛れているといいんだけど…

そんなことを考えながら、出来るだけ明るい声で返す。

「う～ん、だめだよ？お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

…痛いとこを突かれた、確かに営業妨害かも…で、でも仕事の途中で寄ることが多くて、何かを買って持っていくわけにもいかないし…それにたぶん何か買ったら、追い返されそう…

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

少しでも、この子のことが知りたくて、何か話してくれれば何かしてあげられそうなのに…

「……あなたが、帰ってくれれば元気になりますよ」

うぅ…今の言葉は少し、いや結構堪えた…そ、そんな敵意をストレートに向けられると、けどここで諦めたくなくて…

「その…話したくないなら無理にとは言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

そう…これは私がこの数年で学んだこと、一人でいる限り、辛さや寂しさはなくならない…誰かに少しだけ話すだけでも、楽になることだって…いっぱいあるんだよ？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「――――――！！？」

返ってきたのは、いつも通りの感情のない声…向けられた目は、まるで…この世界に何も期待していないような、まるで何十年も経て悟ったかのような、冷たい…とても冷たい目をしていた。

「ご、ごめん…また、来るね…じゃあ」

その場に、居続けることができなかった。あんな目を見たのは初めてだった…

私が…が考えてたよりも…あの子の闇は大きいのかもしれない…

そう、なんだか…死にたがっているようにすら見えた…

第三話「出会い？」（後書き）

やっと原作キャラの登場で「なのは」らしくなってきたかな？
…まだかＯＲＺ

次が導入編の最終話です、その後舞台はＳｔｒｉｋｅｒＳへと移ります。

第四話「転機？」（前書き）

導入編ラストです、やっと主人公の名前が明かされます。

第四話「転機？」

――望まないまま幕を開けた第二の人生、前世と変わらない一人ぼっちの人生のはずが…

「――――って訳で、やっぱり一人のままじゃ出来ないことも多いと思うんだ」

「……その考えは否定しませんし、正しいとも思いますが、俺には関係ないです」

感情なく返した言葉に苦笑いするのは、ここ最近しょっちゅう来る常連の冷やかし…もとい今現在は客の、「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」（執務官試験に向け勉強中）。

…なんで、ファミリーネーム２つあんの？ミドルネームってやつかな？よくわかんね。てか、毎日こんなとこ来て勉強はいいのか？てか試験て筆記とかなのかな？まぁ、興味はないけど。

まぁ、ともあれこのフェイトさん（今は一応年上なので）毎日毎日うちの店？に来ては、保護官みたいな世間話ばかりしている。

「やっぱり、手際がいいね～その歳でそこまでできるなんてすごいよ！」

「……まぁ、これが仕事ですからね」

現在俺は、このフェイトさんのデバイスの清掃メンテをしている。あまりに毎日来るので、昨日「冷やかしならもうくんな！！」的なことを言ったら、今日来るなり頼まれた。

てか…なんだこのデバイス、インテリジェントデバイスにベルカ式カートリッジシステム、最近急速に進んでる研究ってのは知ってたけど、実物見たのは初めてだ。

繊細なインテリジェントデバイスに、カートリッジシステムは相性が悪く、研究はされているが流通している物は、殆どアームドデバイス形式のはずだ。

しかしこのデバイスは、それを全く感じさせない。しかも、そのカートリッジもミッド式ではなくベルカ式、内部の構造も見たことないような高級パーツがふんだんに使われてて、まさに『一人のために作られた傑作』とでも言える出来だった。

このデバイス設計した奴、どんな頭の構造してんだ…てかこんなの、公園で露店してる子供にメンテ頼むって、どういうことだ。まぁすごい勉強にはなるが…

「あ、そういえばこの間、地球の海鳴市で美味しいケーキ屋さんを見つけてね――」

また来た、地球の話題。いつだったか、話の中で地球という単語が出てきて、つい反射的に反応して、「自分も地球の事をそれなりに知っています」みたいなことを言ってしまってた。

それからというもの、まるで攻め込む隙を見つけた！とでもいうような勢いで、毎日地球の話題を話してくる。地球の友達の事、最近

あった出来事、地球の食べ物、よくまぁ話題が続くもんだと感心する。

しかし、話を聞く限り、どうもこの世界の地球は俺の居た地球とはどこか違うような印象だった。…いちいち話したりはしないけど…

「ねぇ…そろそろさ、えと…名前、教えてくれると…嬉しいんだけど…」

名前？そういえば考えてなかった。この世界での本当の名前は、俺は知らない。前世の名前は完全に日本人の名前＝ミッドチルダでは珍しい。アパート借りる時、不思議そうな顔されたもんな…

それから、聞かれることなんて無かったから…考えてなかった。とりあえずここはシカトだ。

そんなことを考えてる内に、メンテは終わった（てかすることなんて殆ど無かった）

「……はい、終わりましたよ」

余計なことは言わない、食いついてきても面倒だし…

「ありがとう！…えといくらになるかな？」

「……５００です」

「え？それはいくらなんでも安すぎない？普通の専門店の３分の１くらいだけど…」

「……子供の露店で客を呼ぶには、安さぐらいしか武器はないですからね」

「そっか…えと…細かいのは…」

———ピピピ！

フェイトさんがお金を探そうとしていると、何やら通信が？

「ごめん！ちょっとまってね」

そう言って、通信するフェイトさん。が、次第にその顔は青ざめ…というか蒼白といえるくらいに変わっていく。

「…うそ、なのはが…そんな…」

なのは？えと、確か地球の友達で管理局のエース様だったっけか？

「うん！すぐ行く…場所は？…うん分かった！」

焦ってる様子なので、声をかける。

「……急ぐんですよね？お金はどうせまた来るんでしょうし次会ったときでいいですよ」

「——！？ごめん！！ありがとう！！また来るから！！今度来た時には、名前教えてね！！」

矢継ぎ早にそう言って、ものすごいスピードで走って行った。…まぁどうせまたすぐ来るだろう。

「……名前、考えとかないとな…」

――――それから少しして、管理局のエースが撃墜されたという噂を聞くようになった、そしてその後フェイトさんと再開するのは8年後だった――

フェイトさんが、走り去った後…いつも通りシートの前に座っていると…

「返して!!返してよぉ〜!!」

という、喧しい声が聞こえてきた。

声のしたほうに目をやると、今の俺と同じ年ぐらいの少年3人、青い髪の少女1人が何か言い争っていた。

「ここは俺様のナワバリなんだから、入ってきたてめえが悪いんだよ!」

小太りの少年が、ポーチだか鞄だかそんなものを振り回しながら、訳のわからないことを言っている。ナワバリって…お前はどこかのライオンか?

「うぅ…返してぇ…」

少女の方は、完全に泣きだし同じセリフを繰り返すだけ…

…うるせえ…喧嘩ならよそでやれよ。

「おいそこのお前！何じろじろ見てんだよ！！」

小太りの後ろに居た少年…仮に子分Ａとする。その、子分Ａがこちらに気付いたのか声を張る。

「あ～ん？てめぇ…なんか文句でもあんのか？」

小太りがこちらに近づいてきて、俺の胸倉を掴んで、旧時代のチンピラみたいなセリフを吐いた。

「俺様は――――ふぎゃあ！？」

顔が近かったので、とりあえず殴った。

「て、てめぇ…い、いきなり何しやが――るふぁ！？」

尻もち付いて、涙目で何か言ってきてたので、次は顔を蹴った。涙を流しながら、子分Ａ，Ｂ共々怯えた目でこっちを見ている。まぁ当然の反応か…

「……やかましい、失せろ……もう一回殴るぞ？」

とりあえず退場いただこう。「もう一回殴る」の部分にビク！っと

した小太りは、慌てたように走り去って行った…子分A，Bははるか前方を走ってた。…人望ねぇな小太り…

騒音の現況が走り去った後、俺の足元にはさっき小太りが振り回してたポーチのようなものが、落ちていた。

「えぅ…そ、それ…」

青い髪の少女がこっちを見て、涙目で何か言おうとしている。…ああ、これこいつのか。

「……ほら」

ポーチ？を拾い上げて、その少女に渡し、俺はいつものシートの前に戻る。

騒音の元は、去ったしこれでいつもの日常が返ってきた。

……さっきの少女が隣に座って、こっちを見ている以外は！！

なんだ？この状況、なんか文句があるのかこいつ…ああ、あれか？実はさっきの小太り達は友達で、お遊びでやってましたとかそんなのか？…だとしてもうるさいお前らが悪い。

「あ…あの…」

やはり何か言いたいことがあるようで、こっちをチラチラ見ては顔を伏せる少女。

「……なんだよ？何か言いたいことがあるのか？」

とりあえず、聞いてみる。もし文句だったら、適当に怒鳴ればどっかいくだろ…

「あの…その…ポーチ…あ、ありがとう…」

…は？

「取り返してくれて…ありがとう」

ああ、こいつには今のは、俺がこいつのためにポーチを取り返したように見えたのか、絡んできたから追っ払っただけで、割って入る気なんてなかったんだが…

「……商売の邪魔だった奴を、追っ払っただけだ助けたわけじゃねぇよ」

「…お店、やってるの？」

…失言だった。少女はシートの上に置かれた商品を、珍しげな眼で眺め始める。

まずい…居つかれる前に逃げないと！！

「……そうだけど、もう今日は店じまい」
物を片付け、撤退の準備をしようとする。
「ホント！？」
なぜか嬉しそうな少女。
「じゃあ！一緒に遊ぼ！」
「……は？」
一緒に遊ぶ？何言ってんだこいつ…確かに見た目は同じ年ぐらいだが、精神的にはもう３７歳な訳だし…正直嫌だ…
「……いやだね、俺はもう帰……る……」
断りの言葉を言おうとした瞬間、涙目になる少女。
「うぅ…いっしょに…あそぼ…」
「……いやだから、俺は……」
「…いっしょ…ぐす…あそ…ぼ」
「……」
こいつ、捨てられた子犬のような目で…

「いっしょに…」

「……ああもう！分かったよ遊べばいいんだろ！遊んでやるから泣くな！」

泣きだされても困るので、俺はしょうがなく折れた。…てか…あの目は…無理。

「ホント！！やった～♪！！」

とたん、さっきまでの顔はどこへ行ったか笑顔になる少女。嘘泣き…だと…そんな高等技術をこの歳で…

「……はぁ、とにかく商品を一度家に置いてからな！」

最後の抵抗、一人で帰れたら逃げよう。

「うん！ついてく～♪」

…さいですか。

がっくりと肩を落として歩く俺、後ろを楽しそうについてくる少女…どうしてこうなった？

「あ！！そういえば…」

少女が何かに気付いたように声を上げた。

「……今度はなんだ？」

「名前！」

「……はい？」

「お名前、教えて～」

名前…そういえば考えてなかったわ。ええっと…名前…名前…

「……コウタ」

「こうた？」

とりあえず、前の世界での名前を名乗った。あとはええっと…ファミリーネーム…は…

「……コウタ…コウタ・エルザード…」

とりあえず、孤児院の名前から取った。バランス悪いが、まぁどうせ今日限りだしこれでいいよな。

「コウタ♪」

嬉しそうに俺の名前を呼ぶ少女。

「コウタ！私の名前はね――――」

――――思えば、これが始りだったのかもしれない、俺の…第二の人生の――――

人通りの少ない公園、そこに佇む一人の少女。

「…今日も…いない…か、どうしたんだろう？」

ここ数週間と同じように、少女は誰かを探し辺りを見渡す。

「お店…やめちゃったのかな？…それとも別の場所に変わったのかな？」

そう呟く少女の背中は、どこか寂しげで、

「お金…まだ払えてないよ…名前も教えてもらってない、私はあの子を助けてあげられなかったのかな？」

その問いに、答える人はいなく夕暮れ時の公園には静かな風だけが吹いていた。

「また…どこかで会えたらいいな…」

そう呟き少女は、風になびく金髪を押えながら、公園を後にした。

――――そう、少女は知らなかった。彼女の探している少年は、偶然知り合った青い髪の少女のワガママに付き合わされ、ここ数週間露店を出せずあちこち連れまわされていたことを…二人が再び出会うのは、今から8年後――――

第四話「転機？」（後書き）

やっと導入編が終わりましたＯＲＺ

次回より原作のストーリーに入っていきます。

基本的に原作に沿って、進んでいく予定ですがところどころ変えていきます。

次回は８年たち、主人公の性格が激変しますが、その辺の間の８年間はストーリーの中で入れていきます。

主人公設定（前書き）

箇条書きにて、主人公設定～
話が進むごとに更新します。

主人公設定

≪プロフィール≫（※５話時点）

名前：コウタ・エルザード（旧名：村山幸太）

年齢：１５歳（前世の享年３０歳）

身長：１７４ｃｍ

体重：７０ｋｇ

魔力ランク：Ａ－

魔導師ランク：陸戦Ｃ⇒Ｂ

魔力光：薄緑

階級：二等陸士

術式：ミッド式

ポジション：オールラウンダー（射撃寄り）

得意な事：魔力収束・魔力操作（形状の変化・圧縮など）

苦手な事：魔力の瞬間大量放出（瞬間的に多量の魔力を放出する砲撃魔法などが使えない・収束魔法もしかり）・魔力の遠隔操作

レアスキル：魔力・魔素を目視出来る目（切り替え可能）

所持資格：大型二輪免許、機械設計技術士２級、エネルギー管理士、危険物取扱

趣味：強いて挙げるなら料理（食べるのはほぼスバル）

特技；機械いじり

好きな物：友達、仲間

嫌いな物：自分、神様

リリカルなのはの世界に転生した主人公、当初は枯れた性格をしていたが、８年間で心境の変化があり現在は丸くなっている。
魔力操作・魔力収束については、天賦の才を持っているが、魔力の瞬間大量放出が苦手なため、強力な魔法がまともに使えず、高めの魔力量は宝の持ち腐れ。（Ｂランク相当の魔法は、発動するまで普通の倍ぐらい時間がかかる・Ａランク以上なら３倍以上）
上記の理由のため、収束はできても発射の「瞬間」に多量な魔力が必要な収束魔法・砲撃魔法は使用できない。
また、魔力の遠隔操作も苦手なため、誘導弾・フェイクシルエットなどの遠距離操作魔法も使えない。
その為、魔力を圧縮することで威力を、加速魔法を組み込み、速度・連射を上げることで命中力を上げている。（圧縮なくティアナと同じ時間でシュートバレットを発動した場合の威力は、半分以下）
目下の悩みは、火力不足
転生前は、なかなかハードな人生を歩んできたため、自分に対して損得勘定なく向けられる好意や優しさが苦手。
前世を通して初めて「絆」と呼べるものを手にしたせいか、友達や仲間を大切にしていて、感情の機微にもよく気がつきフォローなどもするが、自分の事や気持は他人には話さない。
本人曰く「目的も、目標もない」ため、昇進やランクアップに対しては興味がなく、約５年前に自身に誓った想いだけで魔導師を目指した。
スバルとは７歳の頃からの幼馴染といっていい関係で、昔からワガママに振り回されている。
ティアナ曰く「スバルに弱い」。
普段はめんどくさいなどやる気のない発言ばかりをしているが、実際は傷つくのが怖く、予め「いやいや付き合った」などの言い訳を用意したいがために、やる気なく振舞っていて、自分でもそれを自覚しているため自分が嫌い。（根は真面目なお人好し）

前世と幼少の頃、職としていたため機械いじりが得意。
フェイトとは、幼少の頃に面識があり、そのころ取った態度について謝罪したいと思っている。
どのポジションも本職には敵わないが、それなりにこなせる為、ポジションチェンジが得意なオールラウンダー。（スバル・ティアナと組む際は主にフルバック・クロスシフトではガードウィング）
オールラウンダーとして、スバルやティアナに付いていくため、訓練校の頃から毎晩自主トレを欠かさず行っている。（隠れてやっているため周りの評価は、いろいろこなせる天才）
とある事情のため、ゲンヤに対しては頭が上がらない。

≪デバイス≫
名称：なし
種類：ストレージデバイス
形状：ショートライフルの上下に刃がついた両刃の銃剣
カートリッジ：2発
・近接と遠距離と、どちらでもこなせた為制作したデバイス。
ＡＩはプログラム制作が面倒なため搭載してない。

主人公設定（後書き）

魔法と分けます。

基本的に主人公はそこまで強くはないです、
攻撃力・防御力はスバルより低く
幻術・射撃ではティアナに劣り
突貫力・スピードはエリオに届かず
補助・支援ではキャロより効果が低い
といった感じになります。

後半になれば強くなっては行きますが…

後、オリジナルキャラは主人公と後1体（人間じゃない）しか出さない予定です。基本的には原作に主人公が加わるという形で進んでいきます。

使用魔法設定

≪使用魔法≫（5話現在）　※原作登場は○オリジナルの物は横に☆

【砲撃魔法】

なし

【射撃魔法】

魔力の遠距離操作が苦手なため、弾に誘導性を付与できず、すべて直射型。
魔力の最大放出量も低いので、魔力を圧縮することで威力を上げている。

○基本的なショット系魔法（使えるだけで威力が低く、時間もかかるため改良したものを使用）

☆シュートパレット改

直射型
魔力の遠距離操作が苦手で、誘導性が付与できないため改良。
加速系魔法の術式を応用しているため、速度と連射性能に優れる反面、火力は低い。

☆ストライクシュート
直射型
カートリッジ1つ消費、圧縮した魔力弾が、着弾した瞬間に爆発する。

範囲はそこそこあるが、威力は低めのため主に仲間との同時射撃で使用。
名称は2人の魔法に合わせる形で付けた。

☆スパイラルパレット

直射型
魔力で作った三角柱型の弾に、ドリルの要領で回転を加えたショット。
貫通力・速度に優れるが、サイズはビー玉位で爆発もしないため、バリア破壊ぐらいしか使い道はない。

☆ソニックパレット

直射型
速度＝威力、カートリッジを2発ロードして発動する。
様々な加速魔法の術式を応用して、音速を超える速度で圧縮した魔力弾を打ち出す。
ただし、魔力の圧縮にかかる時間が約1分、とても実戦向きではない。

☆スナイプパレット

直射型
量遠距離用魔法、最大射程は約3ｋｍ、カートリッジ2発ロード。
圧縮した魔力弾にドリル回転を加え、威力よりも貫通力に特化した射撃。弾速も速い。
ただし、魔力圧縮に約2分かかるため、使用機会は殆どない。

☆ジャンクパレット

直射型
簡単にいえば、「スターダストフォール」の劣化版。
サイズの小さい瓦礫などを加速させて打ち出すだけの魔法。
打ち出せるサイズは最大で掌に収まるくらいまで。ＡＭＦ対策に開発。

【近接魔法】

☆スパイラルランス

デバイスの先に、魔力を螺旋回転させ貫通力を高める魔法。
フィールド貫通効果などはない。

【幻術魔法】

○オプティックハイド
術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。

【防御魔法】

○基本のプロテクション・シールド

○アクティブガード
低速の爆風を発生させ、対象の速度を減衰させたり、柔らかく受け止める。
爆発の規模等は、目算で調整する。

○ホールディングネット
網状の魔法で対象をキャッチする。

【捕獲魔法】

○リングバインド
基礎的なバインド魔法。

【補助魔法】

○フィジカルヒール
軽傷を直す程度の回復呪文、コウタはあまり得意でないため時間がかかる。

○フィールドインベイド以外の基本ブースト系魔法

☆ブーストアップ・ジャンプ
脚力を強化する補助魔法。
主にジャンプで移動する際に使用。

【移動魔法】

☆浮遊
魔力によってその場で１０ｃｍほど浮くだけの魔法。
移動はできない、スバルに引っ張って移動してもらう際に使用。

○ソニックムーブ
あたかも瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

○ブリッツアクション
腕の振りやフットワーク等の体全体の動作を高速化するための魔法。
近接戦闘の際に使用することが多い。

使用魔法設定（後書き）

主人公は魔力量は多いですが、瞬間的に引き出せる魔力が人より少ないため、発射の瞬間に大量の魔力を消費する、収束・砲撃魔法が使えず、人より多めの魔力量も魔力切れがしにくい程度にしか、扱えてないという設定です。

その為、通常の魔法を得意な魔力の圧縮により、密度を高め強度と威力を上げています。しかし全体的に火力に欠けます

具体的にはこの時点で?型のガジェットと戦うと、ほぼ打つ手がないです。

第五話「試験？？」（前書き）

いよいよ原作ストーリーに入ってきました。

しかし長いので分割します。

第五話「試験??」

――――ミッドチルダ臨海第８空港近隣――――

破棄された都市街のビルの屋上に、３人の男女がいた。

一人は、足にローラー、腕にナックルを付け、すさまじいスピードでシャドーをする、青い髪の少女。

一人は、拳銃型のデバイスを持ち、落ち着いた様子で調整している、オレンジの髪の少女。

一人は、ショートライフルの上下に刃が付いたような銃剣を、柵に立てかけ『ワガママ女性の対処法～試験編～』と書かれた本を読んでいる少年。

３人は、三者三様の状態で、これから始まる「試験」を待っていた。

「…スバル、あんまり暴れてると、本番でそのオンボロローラーいっちゃうわよ？」

「ティア～嫌なこと言わないでぇ～、大丈夫だよ！ちゃんとこの日に備えてコウタにデバイスのフルメンテしてもらったもん！…ね？コウタ」

そう言ってこちらを向くのは、俺の幼馴染「スバル・ナカジマ」…ワガママな怪力女だ。思えばここ８年間の苦難等は、８割近くこいつが原因だった気がする。

俺は、手に持っていた愛読書…もとい人生の教本を腰のポーチにしまいながら答える。

「スバル、いい事を教えてやるメンテナンスってのは、性能を保つための保守であってだな…お前のオンボロローラーが新品に変わるわけじゃない。…壊れるかどうかなんて知らん」

「うぅ…コウタが冷たい…」

よく言うよ、フルメンテなんて手間のかかるもん頼んできたくせに。

「まぁでも、知り合いにデバイスに詳しい奴がいると何かと便利よね。私たちのは支給品じゃないから、定期メンテはともかくフルメンテは大変だしね」

そう言いながらこちらに歩いてくるのは、「ティアナ・ランスター」（愛称はティア）俺とスバルとは訓練校の頃からの知り合いで、よ

く組んでいる。…ワガママな凶暴女だ。

「俺に得することが、何一つないんだが？」

「なにいってるのよ。そのおかげでこんな美少女二人と一緒にいられるのよ？」

何言ってんだ…このオレンジ。

「ならその美少女二人を早く連れてこい。今俺の視界にいるのは、青髪の怪力女と、オレンジ髪の凶暴女だけ――――ごふぉ！？」

俺の鳩尾に、ティアの拳が突き刺ささり、膝から崩れる。

「なんか言った？」

こ、こいつ…鳩尾を正確に…てかバリアジャケット着てんだぞ！なんだこのダメージ。

「お、お前…絶対ポジション間違え…「なに？」――――ごめんなさい」

まだ開始してないけど、帰りたい…よし帰ろう。でも、了承取らずに帰ると後が怖いから…

「なあ？スバル、ティア一つ相談したいことがあるんだけど…」

「うん？どうしたの？「帰る」以外なら何でも聞くよ♪」

「なに？「もう帰りたい」以外なら聞いてあげてもいいけど？」

「……」

二人がほぼ同時に答える。何こいつら、エスパー？

図星を突かれた俺が黙っていると、ティアが肩を震わして…

「まったく！あんたはどうしてそう！いつもいつもやる気がないの！！」

やべえ、説教モードに入りやがった。俺は助けを求めるようにスバルを見るが、スバルは明後日の方向を向く…おいこっち向け幼馴染。

「だいたい、今回の試験だってスバルが申し込んだからいいようなものを…絶対受ける気なかったでしょ！！」

「……」

ティアの言うとおり、俺のこの試験への申し込みはスバルが代わりにやった。…もちろん事後承諾である。

……まぁでも、たぶんそうじゃなくても一緒に受けたいし、申し込んだろうけど、そんなことは口が裂けても言わない。

ある程度、ティアが怒鳴り終わった辺りで、スバルが仲裁に入る。

…遅いよ

「まぁまぁ、ティア。コウタだって試験が始まれば真面目にやるよ、ね？」

「まぁ…な。手抜いて長引くのはかんべんだし、一応は真面目にやるさ」

ティアが俺の不真面目さを叱って、それをスバルが仲裁して…まぁいつものパターンだ。

「はぁ…まったくスバルといい、コウタといい…どうしてこう手がかかるのかしら…」

「ははは、ご苦労さま。…で、ティア時間は？」

自分の事はとりあえず棚に上げて話題をそらす。

「ちょっとまってね、ええっと…」

答えながら、ティアナが右手を弄る。すると空中に小さなモニターが現れ、現在の時間が表示された。

すると、すぐにカウントダウンが始まり試験開始の時刻になった。

俺達がそれを確認するのとほぼ同時に、スバルの後方辺りにモニターが現れ、銀髪の少女が映る。同じ髪の色だ、ちょっと親近感。

俺達がそちらを振り向くのを確認してから、少女は腰に手をあてて口を開く。

『おはようございます！…さて、魔導師試験の受験者さん3名。揃

ってますか？』

「「「はい！」」」

一列に並び、元気良く返事をする。…やっぱ公私はしっかり分けないとね。モニターの少女は、しっかりした返事に満足したように一度頷き、手に持ったバインダーに視線を移す。

『確認しますね。時空管理局陸士３８６部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と』

「はい！」

『ティアナ・ランスター二等陸士』

「はい！」

『コウタ・エルザード二等陸士』

「はい！」

『所有しているの魔導師ランクは、陸戦Ｃランク。本日受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇級試験で間違いないですね？』

「はい！」

「間違いありません」

「間違いないです」

俺達の答えを聞くと、少女は視線をバインダーから戻し

『はい！本日試験管を務めますのは、私、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長です。よろしくですよ～』

そう言って、リインフォース？空曹長は敬礼をする。…どう見ても今の俺より年下なんだけど…曹長！？ほんとどうなってんだ？この世界の労働基準…

「「「よろしくお願いします」」」

心の葛藤を押し込めて、二人と共にそう言って敬礼を返す。

いよいよ試験が始まろうとしてた。

――――上空――――

ヘリの中から試験会場を見る二人の女性。

「お、さっそくはじまってるな～。　リィンもちゃんと試験管してる。　ふふ」

そう言って、全開のドアに手をかけほほ笑む茶髪の女性は、時空管

理局二等陸佐「八神はやて」

「はやて、ドア全開だと危ないよ。　モニターでも見られるんだから…」

椅子に座り、風になびく髪を押えながら話す金髪の女性は、時空管理局本局執務官「フェイト・T・ハラオウン」

「は～い」

その言葉を素直に了承し、ドアを閉じ座るはやて。

「この三人が、はやての見つけた子たちだね」

モニターを見ながらフェイトが話す。

「うん、三人ともなかなか伸びしろがありそうな、ええ素材や」

「今回の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「ん～直接の判断は、なのはちゃんにおまかせしてるけどな？」

「…そっか」

モニターを見て、嬉しそうに目を細めるフェイト。

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下、う～ん一人どっちに入れようか迷ってる子もおるんやけど…なんにせよ教え子になるわけやからな…って、フェイトちゃん？なんか嬉しそうやな？」

「…うん、まぁね」

「…？」

嬉しそうなフェイトと、よく分からない様子のはやて。

「（8年ぶりか…また…会えたね）」

――――建物内――――

モニターの前で何やら作業をしている、茶髪ロングをサイドポニーテールにしている女性。

≪範囲内に生命反応、危険物反応はありません。コースチェック終了です≫

「ん、ありがとうレイジングハート。観察用サーチャーと、障害用のオートスフィアも設置完了。私達は全体を見てようか」

≪イエス、マイマスター≫

――――そして陸戦魔導師Ｂランク昇級試験が、始まる――――

第五話「試験？？」（後書き）

３０００文字以上書いて、まだ開始すらしてないとか…Ｏｒｚ

次回は初の戦闘シーン…さてどうなることやら…

第六話「試験??」

『三人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊』

モニターに映る銀髪の小…いや幼女。この試験の試験官リインフォース?空曹長、見た目は完ぺき幼女だが、階級は俺より3つくらい上…映ってる映像から推測するに、背も小さいんだろうな。

『あ!もろん破壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますからね』

試験官の言葉に応えるように、空中にモニターが表示されターゲッドなどの情報が映る。ダミーは青色ね。

『妨害攻撃に気をつけて、すべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。

…何か質問は?』

内容が理解できているか、最終確認をする試験官。要は「ダミー以外のターゲットを破壊しながら制限時間内にゴールへ向かう」ってことだ。

「あ…え〜っと…」

呟きながら俺とティアをチラ見するスバル。

「ありません!」

「ないです!」

ティアと俺は答える。

「ありません！」

俺達の答えを聞いて安心したのか、返事をするスバル。

『では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう、ですよ！』

試験官がそう言い、モニターが消えると同時にスタート用の、カウントが表示された。

今は青いランプが３つ。

「確認するわよ！左側と正面のビルのターゲット破壊は、私とスバルで、コウタは迂回して距離が離れているターゲットをお願い！その後、コース沿いに合流！」

ティアが、早口に説明する。なるほど…数が多いところは二人が受け持ち、距離が離れてまばらにあるターゲットは俺が破壊しながら合流か…

「おっけ～」

「分かった、じゃスタート直後はお前らが正面、俺が右だな」

スバルと俺の返答に頷き、視線をカウントへ戻す。黄色い２つのカウントが消え、赤いカウントが一つ表示される。俺達はそれぞれスタートの構えをとる。

「レディー！」

ティアがタイミングをそろえるために声を出す。…最後のカウントが消える

「「「ゴー！！」」」

３人の声が重なり、俺達は一斉に駆け出した。

俺はスタートしてすぐ、右に曲がり走りながら魔法の準備をする。

「我乞うは、力強き跳躍。我の両足に、大地蹴る力を――≪ブーストアップ・ジャンプ≫」

俺の詠唱に呼応して、魔力で強化された肉体に、更なる跳躍力のブーストがかかる。そのまま柵に向かい、隣のビルの屋上、そして次のビルの屋上へとジャンプしながら移動する。

途中デバイスに表示されている探索魔法の情報を確認しながら、ターゲットのあるビルの前へと辿り着き、銃剣型のデバイスから魔力弾を連射する。

魔力弾は、マシンガン並み…ごめん、言いすぎた。それなりの早さで連射され、窓際に並ぶターゲットを次々破壊していく。

けど、よく見ればかなり外してる。

訓練校に入り、本格的に魔法を学んでいて分かったことだが、俺は魔力の収束・魔力操作に関してはかなりの才能があったようで、更には魔力量も同年代と比べかなり多かった。

とここまでなら、天才と言われてもおかしくなかったが…やはり世の中そううまくはいかない物で、俺には2つの大きな欠点があった。

一つ目は魔力の放出量が同世代と比べ、半分以下しかなかった。

簡単に説明してしまえば、魔力量を水道タンク、放出量を蛇口に例えるなら、俺は人より量の多い水道タンクを持っているが、蛇口が人よりかなり小さいため一度にたくさんの水を出すことができない。

結論から言ってしまえば、魔力の収束はできてもそれを放出することができないため、収束魔法はおろか砲撃魔法も使うことができない。

射撃魔法は強力な物でなければ使うことができるが、他の人に比べ発動までに倍近い時間が必要になる上、今使っているシュートパレットと言う射撃魔法の基本中の基本の物でさえ、普通に使えば魔力密度の低い、スッカスカの弾が出来上がる…まぁ時間かければ通常の物ぐらいにはなるが…戦闘中にそんなに時間がかかるのは致命的。

その為俺は、通常野球ボールくらいの大きさの弾を、得意な魔力の圧縮でビー玉サイズまで縮小し、密度を上げることで強度を、【ソニックムーブ】の術式を応用することで、弾速（速さ＝威力）を、

【ブリッツアクション】の術式を応用することで連射性を上げて使っている。

まぁ、言ってしまえば普通の物より威力は少し低いけど、スピードと連射性は上のショートパレットだ。

2つ目の欠点は、魔力の遠隔操作がまったくと言っていいほどできない。

これは、射撃を中心に戦う魔導師には致命的で、要は弾に誘導性がないため、まっすぐにしか飛ばない。これには当初本当に困り、近接戦闘主体のベルカ式に変えようかと思ったほどだが、残念ながら俺にベルカ式の資質はなかった…

まぁ出来ないものは出来ないで、しょうがないため「数打ちゃ当たる」の理論で連射性を、「避ける前に当てる」の理論で弾速を強化した魔法を使っていくことにした。

以上の事から、先に挙げた「魔力の収束が得意・魔法量が多い」は完璧宝の持ち腐れになっていた。

…って誰に説明してるんだ俺？

頭の中で、謎の第三者に説明してる内に、ターゲットの破壊は完了

した。…ダミー混ざってなくてマジよかった。
探索魔法をかけると、どうもビルの内部にまだ一つあるみたいだが
…ここからじゃ狙えない、狙える位置まで移動している時間はない
…ここは、直接たたくか。

俺はブーストと一旦解除し、マルチタスクで2つの魔法を準備しながら窓のないビルの内部に飛び込む。
ターゲットの前に設置された2体の妨害用のスフィアが、俺に反応し攻撃の態勢に入る。
「≪ブリッツアクション≫！！」
着地と同時に、準備していた魔法の一つを発動、着地動作から駆け出す体勢までの動きを加速する！そして駆け出す瞬間に…
「≪ソニックムーブ≫！！」
高速移動魔法により、一気に新幹線並みのスピードまで加速する。
動作を加速したまま、目の前に並ぶスフィアを横なぎに刃部分で一閃！速度を緩めず、そのまま正面のターゲットを突き刺す！
――――ドガン！！

俺が停止し、やや遅れて後ろで先ほどのスフィアが爆発する。

「よし…これでこの辺のターゲットは全部か…」

探索魔法で確認、この辺にはもうターゲットはないみたいだ。

しかし、もうかなり使っているがソニックムーブの移動速度にはまだ慣れない。最初の頃はうまく止まれず何度も転んだっけ…でもトップクラスの使い手は、この倍以上の速度で移動するってい言うんだから驚きだ、いくら魔力で強化してても目が付いていくか？

「まぁそういうの出来る奴は、ばけも…」

化け物みたいな奴なんだろう、と言いかけて…やめた。

頭によぎったのは、管理局内でこの魔法の1、2の使い手の女性。

…子供だった頃、俺を心配して、いろんな言葉をかけてくれた人…そんな人に対してずいぶん酷いことを一杯いってしまった昔の俺。謝罪したいと思い、陸士になってから探してはいるんだけど…かなり忙しいようで、未だ会えずにいた。

たとえ誰も聞いてはいなくても、あの人の悪口は言いたくなかった。

…会いたいな…

（コウタ！こっちは終わったけどそっちはどう？）

「――！？！？」

物思いにふけっていると、ティアから念話が入る。やべ、今試験中だった…

（こっちも終わった、追いかけて合流するから先に進んでてくれ）

（わかったわ、急いで来なさいよ）

（了解）

とりあえず、考えるのは後だ、早く追いつかないと…

俺は再度ブースト魔法をかけ、先行してるであろう2人を追いかけた。

――――上空――――

「三人とも、いい動きだね」

「そやな、特にあの男の子面白いな」

ヘリの中でモニターを見ながら、フェイトとはやてが話す。

「最初にブースト魔法を使ってて、そのあと射撃、次に近接、オールラウンダーなのかな？珍しいよね」

「うん、まぁでもオールラウンダーは他に比べて成長が遅いもんやから、そのまま行くのは大変やろうけど…」

「指導次第では、大化けするかもね」

「そやな、けど…難関はまだまだ続くよ、特に最後に控える、受験生の半分以上を脱落させてきた関門、大型オートスフィア」

「今の三人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい（一人ソニックムーブでかわせそうだけど）…中距離自動攻撃型の狙撃スフィア」

「どうやって切り抜けるか…知恵と勇気の見せ所や！」

「…楽しそうだね、はやて」

「よし、全部クリア！」

デバイスに弾を補充しながら、ティアが話している。

どうやら、結構遅くなったみたいだな。

「あ！コウタ！おそいよ～もぅ！」

スバルがこちらに気付き声をかけてくる。

「悪い悪い、でこの次は？」

謝罪を入れつつ状況を確認する。

「次は、このまま上。上がったら最初に集中砲火が来るわ！オプティックハイドを使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺！やるわよ！」

クロスシフト…訓練校時代から使ってる陣形で、三人にそれぞれ役目を割り振り戦闘する。一番慣れている陣形だ。　パターンが何種類かあり、それによって俺のポジションが変わる。

シフトの後ろに付くアルファベットで判断するが…今回は指定なしってことは、俺とスバルが切り込んで敵を固め、三人の同時射撃で制圧するパターン（俺のポジションはガードウィング）

「「了解！」」

俺とスバルはほぼ同時に応える。

壊れた道路に、ローラーの音だけが響く。ティアがスフィアの狙いを集めてくれているので、オプティックハイドによって、姿が見えなくなった俺とスバルは迂回して近づく。（俺のは効果時間が短いのでティアにかけてもらった）

「5！」

ティアのカウントが聞こえ、俺とスバルは固まっていないスフィアの破壊に散る！

「4！」

スバルが先行し、俺が打ち漏らしを剣部分で叩く！

「3！」

その声が聞こえるとほぼ同時に、オプティックハイドの効果が切れ、こちらを認識したスフィアが攻撃を仕掛けてくる！それを回避しながら射撃の準備に入る！

「カートリッジロード！」

俺はカートリッジを一つロードし魔力の圧縮を始める。

「2！」

俺に迫るレーザーをスバルがリボルバーナックルで弾き、そのまま跳躍する！

「1！」

その声を聞き、俺はその場に停止し！射撃の態勢に入る！（スフィアの攻撃はスバルが引き付けてくれている）

「ゼロ！！」

発射の掛け声と同時にティアが姿を現す！

「クロスファイヤーッ！」

「リボルバーッ！」

「ストライク！」

「「「シュート！！！」」」

三人の掛け声と共に発射された射撃は、固まっていたスフィアに正確に当たり爆煙を巻き起こす！

煙が晴れると、スフィアは綺麗に一掃されていた。

「イエーイ！ナイスだよ二人とも！一発で決まったね！」

「ま、あれだけ時間があればね」

「…だな」

よかった、命中して…俺あのショットの命中率６割くらいだもんな…

「普段はマルチショットの命中率、あんま高くないのに、ティアはやっぱ本番に強いな～！」

スバル…それ褒めてねえぞ。

「うっさいわよ！」

「いやでも、羨ましいぞティア…俺マルチショットできねえし」

いいなぁマルチショット…俺も打ちたいな。

「コウタはティアよりたくさん展開できるけど、発射できないもんね～」

「うるせえよ！」

スバルのセリフが突き刺さる。確かに…展開するだけならティアの倍の数はいける自信がある。でも…展開できるだけで発射できない…くそぅ

「二人とも遊んでないで、さっさと片付けて、次に…！？」

「うん？…！」

俺もティアにつられて視線を動かすと…

打ち漏らしがあったのか、スフィアが一つスバルに狙いを定めていた！

「スバルッ！！防御！」

ティアが叫びスバルを突き飛ばし、自身も逆方向に回避する！

「チィッ！！」

俺は慌てて、デバイスを構えスフィアに向けて魔力弾を連射する！

発射の瞬間、グキ！と言う嫌な音が聞こえた…

――――上空――――

「！？なんや？」

突如モニターの映像が消え、困惑するはやて。

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど…」

フェイトはそう呟き、映らなくなったモニターを見る。

――――建物内――――

白い服を着た女性が、映らなくなったモニターを確認し、通信する。

「トラブルかな…？リイン、一応様子見に行くね」

『はいです、お願いします』

≪セットアップしますか？≫

「そうだね、念のためお願い。」

――――廃道路？――――

「ティア！！」

足を押え座りこむティアに、スバルが駆け寄る。　駆け寄る？……ローラーの場合どういうんだ？

「騒がないで！なんでもないから！」

っとそんなこと考えてる場合じゃねえな。

「嘘だ！グキッって聞こえたよ！捻挫したでしょ？」

「だから…なんでもないって――――くぅ、あた！」

立ち上がろうとして痛んだのか、再び膝が崩れる。

「動くなティナ。見せろ」

俺はティアのそばにしゃがみ≪フィジカルヒール≫を使う。が…これは…

「…駄目だな、結構酷くやってる。俺の回復魔法じゃ、時間がかかる」

俺の使う回復魔法は正直、あまり効果は高くない、せいぜい小さな傷を塞ぐぐらいだ。捻挫は酷ければ結構治療に時間がかかる。

「そんな……ティア…ごめん、油断してた…」

スフィアに気付かなかったのを後悔してるのか、スバルが謝る…気付けなかったのは俺とティアも一緒なんだがな。

「私の不注意よ…あんたに謝られるとかえってムカつくわ」
そしてこいつはまた、自分の責任にしてる。…まぁ昔からか…
「制限時間内に治りそうにはないわね、私が離れた位置からサポートするから、あんた達二人でゴールして」
「ティア！！」
スバルが声を張る。さて、どうするか…
「うっさい！次の受験の時は私一人で受けるってんのよ！！」
「…次って…半年後だよ？」
「迷惑な足手まとい達がいなくなれば、私はその方が気楽なのよ！わかったらさっさと行きなさい！」
とりあえず回復魔法は一旦止め、成り行きを見守る。

「ティア、私、前に言ったよね。弱くて、情けなくて、誰かに助けてもらいっぱなしの自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入った…魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事に就いた…」
「知ってるわよ！聞きたくもないのに何度も聞かされたんだから…」

あ～俺も聞かされたな、その話と管理局のエース様の話は耳だこだ。

「ティアとコウタとずっとチームだったから！ティアがどんな夢を見てるか、魔導師ランクのアップと昇進にコウタと違って、どれぐらい一所懸命かもよく知ってる！」

…そこで俺を引き合いに出すな。

「だから！こんなとこで！私の目の前で、ティアの夢をちょっとでも躓かせるなんて嫌だ！！一人で行くのなんて絶対に嫌だ！！」

「じゃあどうすんのよ！走れないバック「まぁ落ち着け、二人とも」――！？」

このままじゃ時間がなくなりそうなので、割って入る。ティアとスバルの喧嘩に俺が割って入るのもまぁよくあるパターンだ。

「ティア、スバルの強情さはよく知ってるだろ？こうなったら何言っても聞きやしねえよ…なんか思いついた手があるんだろ？言ってみろよ」

長い付き合いだしそれぐらいはわかる、こういう時のスバルは意見を押し通すためか、頭が回る。

「裏技！反則取られちゃうかもしれないし…ちゃんと出来るかもわからないけど…上手くいけば三人でゴールできる！！」

「ホント！？」

「あ、あ～、えぇと、その…ちょっと難しいかもなんだけど…、二

人にも無理してもらうことになるし…」

そこは自信持って言えよ…

「よく考えると…やっぱ、無茶っぽくはあるし…その…えと…なんていうかその…二人が、もしよければっていうか…」

「ああ～～！！イライラする！」

それは同感だ。

「グチグチいっても！どうせアンタは自分のワガママを通すんでしょ！？どうせ私とコウタはそのワガママに付き合わされるんでしょ！？だったらはっきり言いなさいよ！」

「ま、同感だな…お前が無茶言って、俺とティアがフォローする…いつものことだろ？　大丈夫、今まで上手くいったんだし、今回も何とかなるさ」

俺とティアの言葉に決心がついたのか、スバルは顔を上げて…

「三人でやれば、きっとうまくいくよ！力を貸して二人とも！」

その言葉に、俺とティアは微笑み…

「まぁ頑張ろうぜ…ティア残り時間は？」

「…４分３０秒ね、で、スバル…プランは？」

「はっ――――うん！」

「――――――――って、感じなんだけど…どうかな？」

「なるほどね、強引な力技だけど…現状それぐらいしか手はないわね」

「じゃあまぁ、スバルの考えた作戦で行くとして…」

確かに力押しだが、悪くない作戦だ…ただし、こいつたぶん「あの事」考えてないよな？

「よし！じゃあいこ「ちょっとまて！」…う？」

さっそく行動しようとするスバルを止める。

「その作戦の前に、二人に教えてほしいことがあるんだが…重要な事だ正確に教えてくれ」

「う、うん」

「何を教えるのよ？」

「二人の――――だ」

――――この後、俺には2発の鉄拳が撃ち込まれた――――

第六話「試験??」（後書き）

なっげぇ…試験が…終わらない…細かく書きすぎてるのかな；；；

試験編は次で終了の予定です。

感想を書いてくださった、リンドウさんありがとうございます♪励みになります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6348z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜孤独の歌〜

2011年12月24日04時06分発行